古典的名作の《カルメン》に新鮮な発見！

スイス、ローザンヌ歌劇場で《カルメン》プレミエ

松明が印象的な《カルメン》第1幕（10月の日本公演に関しては別冊の巻末チケット・インフォメーション参照）　©Marc Vanappalghem

ホセのヴェントレ（右）が好演

シンプルながら知性が光るベルナールの演出

10月に初来日するスイス・ローザンヌ歌劇場の《カルメン》を一足先に観た。周知のオペラを原典に忠実に演奏するとこんなにも清々しいものになるのかと驚いた。ディーデリッヒの音楽は、舞台はスペインでも、音楽はフランスものだと思い出させる。聴き慣れたアクの強い名曲ではなく、フランス・オペラ特有のレガートから湧き出るようなメロディだった。歌手陣の見事なアンサンブルも、自然体の音楽とベルナール演出の等身大のドラマを体現していた。幕開けで闘牛士たちが十字架の前で祈祷の儀式をしているだけの演出で、観客の集中力を高めて一気にオペラの世界へ引き込んでしまう技は凄い。スペクタルとして成功しつつ、迫真の演技をも引き出していた。

日本公演のカルメン役はスルジァン（写真）、ゲルセワ、ドマシェンコのトリプルキャスト

密輸入業者の4人組は粒が揃っていて耳に心地よく、ミカエラのフールも、声の線は細いが、アリア以外は健闘していた。エスカミーリョのラポワントも品を保って好演していたが、声はあまり飛ばないタイプだ。カルメン役のスルジァンはしっかりした声楽的基礎を持ち、演技も自然だが、カルメンとしては優等生過ぎる歌、隣のお姉さん的存在感では、カルメンのオーラが出ない。特筆すべきはホセのヴェントレだ。堅物な青年兵士が、カルメンの魅力に取り憑かれ、身を落とし、嫉妬に身を焦がされる結末まで的確に表現しつつ、高音の強靭な確実さと切ない歌い回しで酔わせてくれた。来日メンバーに入っていないのが残念だ。

取材・文＝中東生